

# 保育者養成校主宰の子育て広場が学生に与える 教育効果の予備的検討

## —2年生の広場参加後の意識変化に着目して—

小島 佳子<sup>1</sup>， 山崎 めぐみ<sup>1</sup>

### 要旨

本研究の目的は、本学主宰の地域子育て支援活動「すずたん広場」（以下「広場」と略称する）に参加をしたこども学専攻の2年学生の意識が、実践活動後にどのような変化傾向にあるかを明らかにし、「広場」での実践活動における教育効果を予備的に検討することである。

「広場」に参加する学生は、幼稚園教諭2種免許状と保育士資格の取得を目指している。

保育・教育現場において「子育て支援」が重要な活動であるという認識から、2年次後期の「教職実践演習」の授業に組み込み、こども学フィールドワークの授業と連携させながら、学生が主体的に企画・運営にかかわるよう指導している。「広場」の活動は、それまでに受けた授業内容や保育・教育実習での学びに関連付けて、仲間との協働を経験するよう意図されている。実践活動後の学生の意識の変化に着目して、「広場」の教育効果について検討を試みた。

### キーワード

広場における子育て支援活動， 保育カンファレンス， 教育効果

### 1. はじめに

少子高齢化が我が国の大きな課題となり、「子育て支援」が保育・教育現場においても重要な業務となっている。児童福祉法第18条の4では、「保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう。」と定めている。<sup>1)</sup>

また、幼保連携型認定こども園では、「認定こども園法」により、在園及び地域の保護者に対する子育て支援が「義務」として位置付けられている。

さらに、平成29年告示の『保育所保育指針』<sup>2)</sup>では、「子育て支援」、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』<sup>3)</sup>においては、「子育ての支援」として、第4章が新たに章立て

---

<sup>1</sup> 生活コミュニケーション学科こども学専攻

られた。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第4章を開くと、「子育ての支援は、子どもの利益を最優先として行うものとし、第1章及び第2章等の関連する事項を踏まえ、子どもの育ちを家庭と連携して支援していくとともに、保護者及び地域が有する子育てを自ら実践する力の向上に資するよう、次の事項に留意するものとする。」としている。留意する事項として、「第1 子育て支援全般に関する事項」「第2 幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援」「第3 地域における子育て家庭の保護者等に対する支援」の3つの柱が示されている。地域における子育て家庭の保護者等に対する支援では、市町村の支援を得て、地域のさまざまな関係機関等と積極的に連携や協働を図りながら、保育教諭の専門性や幼保連携型認定こども園の特性を生かしたきめ細やかな具体的な支援を行うことが一層期待されている。

今回の改訂によって、保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園等が、地域における乳幼児期の教育及び保育の中心的な役割を果たすことが改めて確認された。

## 2. 問題と目的

保育士養成カリキュラムに「家族援助論」が導入されたのは2002年度からである。その背景には少子化の進行の中で子育て支援の必要性が、強く意識されるようになったことが挙げられる。<sup>4)</sup>しかし、実際に学生が子育て支援を経験できる場・機会は限られている。そこで本学では、子育て支援の重要性を学生に伝えるために、2011年度から10月～12月の期間に生活コミュニケーション学科こども学専攻2年次後期開講の演習授業において、学生主体の保育プログラムを地域の親子に提供する取り組みを行ってきた。さらに、2014年度から地域のニーズを踏まえて学内で子育て支援を行う場として、週2回常設の「広場」を開設している。この「広場」に年間を通して学生を参加させることで、子育て支援について考え、実践する機会をこれまで以上に学生に多く提供し、学生の保育実践力を磨くことができると考えている。

1年生は前期の総合演習の時間に「広場」に参加し、保育実習に参加する前段階として、様々な親子の様子を観察したり、関わったりすること、教員や子育てコーディネーターをモデルとして親子への関わり方を学ぶことを目的としている。<sup>5)</sup>2年次には、後期に開講される「家庭・子育て支援論」の授業において、子育て支援や地域支援に関する知識を学ぶとともに、「教職実践演習」と「こども学フィールドワーク」の授業が連携することによって「広場」における学生主体の実践活動が実現できている。

本稿では、大学主宰の子育て広場における学生の取り組みについて、その効果を明らかにするために、2016年度の短期大学部こども学専攻2年次の「広場」における活動前後に実施した質問紙調査結果と活動後の報告書の内容を検討し、学生が2年次の主体的な実践活動を通して、どのように変化・成長しているのかを予備的に検討し、報告する。

### 3. 2016年度「すずたん広場」における実践活動

対象学生の「広場」への参加の時間は、「専門演習（ゼミナール）」（本学では1年次「総合演習」、2年次「こども学フィールドワーク」の名称となっている）の中に組み込むことで確保してきた。この授業は卒業必修科目であることから、全学生が受講することになっており、授業担当者ごとに全部で9クラスが設けられている。1クラスの在籍者数は8～9名ほどである。参加形態については、表1に示した。<sup>5)</sup>

1年生	前期	参与観察
	後期	部分実習
2年生	前期	部分実習
	後期	企画立案・実施

実践活動の流れは、表2のとおりである。

2年次の主体的な実践活動の中から、「一緒に遊ぶ活動」の保育内容は表3に示した。

表2 ディアリープログラムの一例

9:00	清掃、準備 打ち合わせ
9:45	広場開始（随時受付） 「自由に遊ぶ活動」
10:35	片付け ミニ講座
11:00	「一緒に遊ぶ活動」 手作りプレゼント配布 アンケート記入
11:30	終了、見送り 清掃、後片付け
12:10	保育カンファレンス終了

表3 学生が実施した主な保育内容

- ・名前の紹介（あなたのお名前は）
- ・季節のうた、うた遊び、楽器遊び
- ・手遊び、ふれあい遊び
- ・絵本・紙芝居の読み聞かせ
- ・リズムダンス、体操
- ・新聞ビリビリ遊び
- ・ペープサート
- ・オペレッタ
- ・作って遊ぼう（ヨーヨー作り）

## 4. 研究の方法

### 4.1. 対象

調査実施の対象学生数は、第1回調査が71名（男4名、女67名）、第2回調査が62名（男4名、女58名）であった。対象者には、本調査の目的および倫理的配慮について文章と口頭で説明を行い、質問紙を配布した。授業内で実施した調査であったため、対象者が授業評価等を気にしないで答えられるよう、無記名で回収し、記入漏れなどの不備があったものを除外した。

第1回調査：2016年10月12日 60名分回収（回収率 84.5%）

第2回調査：2016年12月21日 52名分回収（回収率 83.9%）

### 4.2. 質問紙

質問項目は全部で15項目であった。設問1～13及び15に関しては、4件法を用いた（表4）。設問14に関しては複数選択式での回答を求めた（表5）。

表4 質問項目

1 ずずたん広場において、参加の子どもと関わったり、遊んだりできますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ 積極的にできる
2 保護者がいることで積極的に子どもと関わることができないということがありますか ① 全くない ② ほとんどない ③ ある ④ おおいにある
3 ずずたん広場において、参加の保護者と関わったり、コミュニケーションを取ったりできますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ 積極的にできる
4 親子関係に着目して観察したり、関わったりできますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ 積極的にできる
5 子育てコーディネーターや教員から子どもへの言葉かけや関わり方を学ぶことができますか ① 全く学べない ② ほとんど学べない ③ 学べる ④ おおいに学べる
6 子育てコーディネーターや教員から保護者への言葉かけや対応について学ぶことができますか ① 全く学べない ② ほとんど学べない ③ 学べる ④ おおいに学べる
7 授業や実習で学んだ知識や技術を活かして子育て支援活動を行えますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ おおいにできる
8 グループの誰とでも一緒に作業や活動を行うことができますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ おおいにできる
9 自分と違う考え方も大切にグループ内でコミュニケーションを取ることができますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ おおいにできる
10 自分の分担でなくても手伝いが必要な時は、進んで行うことができますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ 積極的にできる
11 保育カンファレンスにおいて自分の語り（意見、反省、気づきなど）ができますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ 積極的にできる
12 保育カンファレンスを通して親子理解と子育て支援への意識を持つことができますか ① 全くできない ② ほとんどできない ③ できる ④ おおいにできる
13 子育て支援活動をする上で大切だと思う態度や姿勢について
13-1 <ふさわしい服装やことば遣い> ① 全く必要ない ② ほとんど必要ない ③ 必要 ④ おおいに必要
13-2 <笑顔や明るい表情、誠実な態度> ① 全く必要ない ② ほとんど必要ない ③ 必要 ④ おおいに必要
13-3 <目配りや気配り> ① 全く必要ない ② ほとんど必要ない ③ 必要 ④ おおいに必要
15 ずずたん広場での活動やカンファレンスはあなたの学びになりますか ① 全く学べない ② ほとんど学べない ③ 学べる ④ おおいに学べる

## 5. 結果

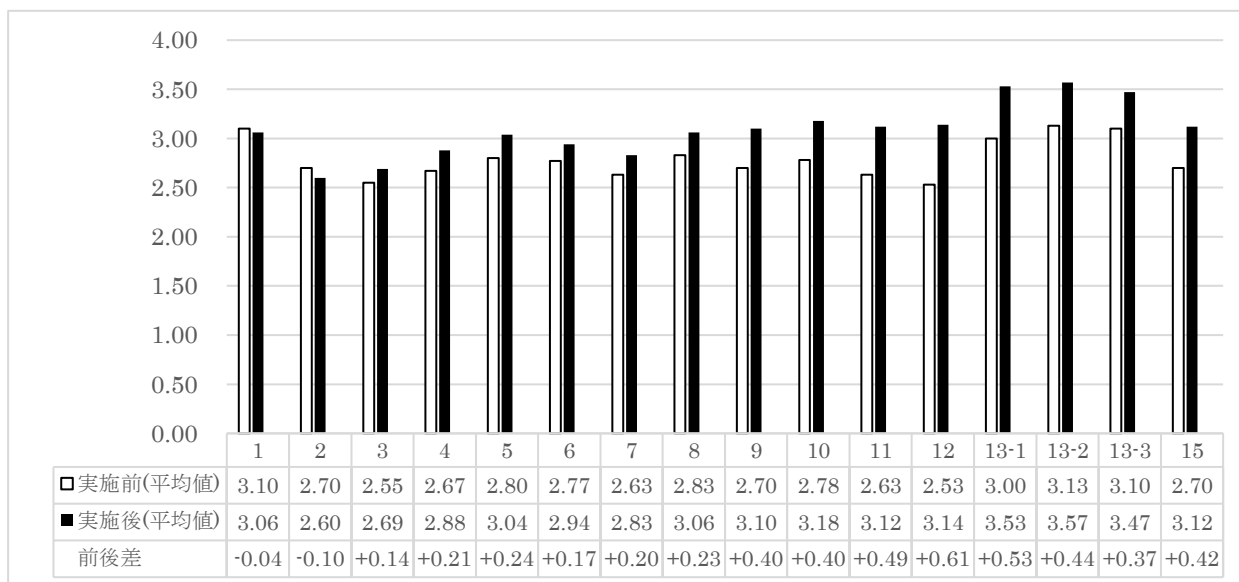


図1 設問1～13、15における実践活動前後の意識・行動変化

実施前後の質問紙の回答について、それぞれ平均値を算出した（図1）。本研究では、質問紙を無記名で回収したため、活動の実施前後で回答を対応することができなかった。したがって、統計的な解析を行わず、平均値の差を用いて結果をみていくことにした。

### 5.1. 実施前後の平均値差が比較的大きかった項目（図1）

グループチームでの協働からの学びに関連した設問(8)、(9)、(10)は、実施後には平均値

がすべて「3できる」を上回っている。前後の比較においても(8)+0.23、(9)+0.40、(10)+0.49と数値が大きく上がっている。

## 5.2. 実施前後の平均値差が大きかった項目 (図1)

### 5.2.1. 保育カンファレンスでの学びの項目

設問(11)、(12)、(15)は、実施後には平均値がすべて「3できる」を上回っている。前後の比較においても(11)+0.49、(12)+0.61、(15)+0.52と数値が大幅に上がる有意な結果が得られた。

### 5.2.2. 子育て支援活動で大切だと思うことに関連した項目

設問 13-1「服装やことば遣い」、13-2「表情や態度」、13-3「目配りや気配り」は、どの項目においても実施前後ともに平均値が「3必要」を上回り、実施後には、(13-1)+0.53、(13-2)+0.44、(13-3)+0.37と大きく平均値が上がっている。

## 5.3. 今後、検証が必要な項目(図1)

### 5.3.1. 子育てコーディネーターや教員からの学び

設問(5)「子どもとの関わりを学ぶ」の平均値は、実施後には「3学べる」を超えているが、設問(6)「保護者への対応等を学ぶ」ことについては、前後ともに「3学べる」には至らない結果である。

### 5.3.2. 授業や実習での学びが活かしているか

設問(7)は、前後の平均値は「3できる」に近いが、「できる」に至っていない。実施後の数値にも、さほどの差がない。

## 5.4. 実施後に学生の意識が変化した項目 (図2)

設問 14に限っては、4件からの選択回答ではなく、複数の選択回答とした。(表5)

表5 質問項目

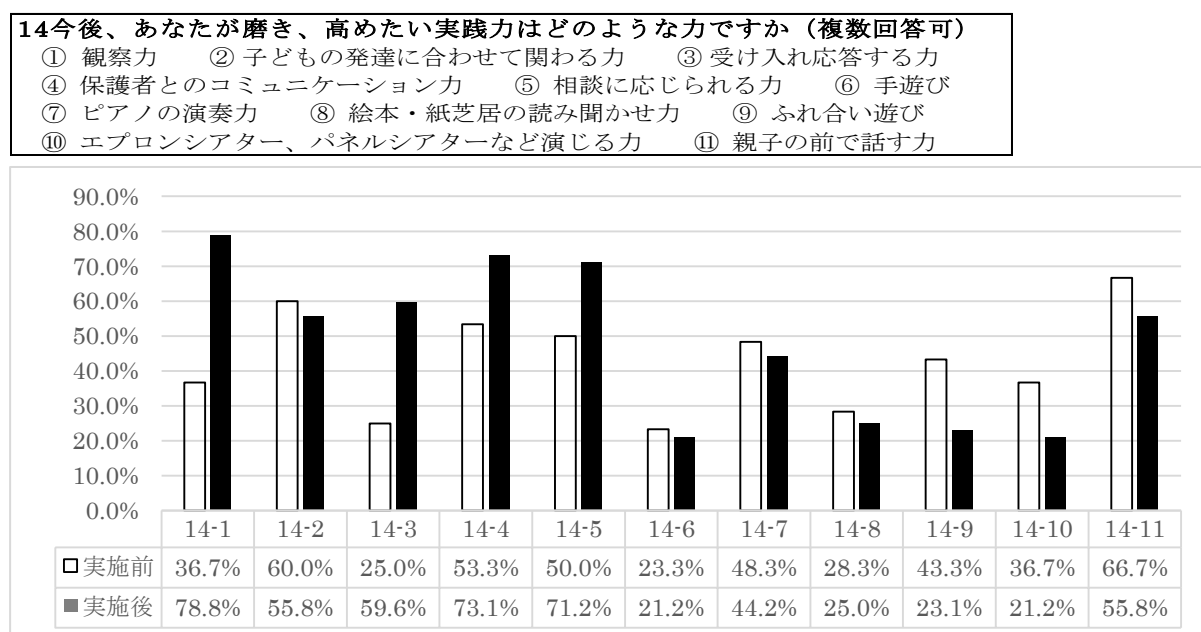


図2 設問 14における実践活動前後の意識変化

### 5.4.1. 学生が高めたいと思っている実践力に関する項目

学生が高めたい実践力として選択した数は、実施前は、平均が 3.6 個、実施後は平均が 5.3 個と高めたいと思う選択項目が増えている。また、実施前後の学生が高めたい実践力として選択した割合を項目ごとに示した（表 6）（表 7）。

表 6 学生が選択した高めたい実践力(実施前)

順位	項目	割合
1	親子の前で話す力	66.7%
2	子どもの発達に合わせて関わる力	66.0%
3	保護者とのコミュニケーション力	53.3%
4	相談に応じられる力	50.0%
5	ピアノの演奏力	78.3%
6	ふれ合い遊び	43.3%
7	観察力	36.7%
	エフ・ロンシアター、ハ・ネルシアターなど演じる力	
9	絵本・紙芝居の読み聞かせ力	28.3%
10	受け入れ応答する力	25.0%
11	手遊び	23.3%

表 7 学生が選択した高めたい実践力(実施後)

順位	項目	割合
1	観察力	78.8%
2	保護者とのコミュニケーション力	73.1%
3	相談に応じられる力	71.2%
4	受け入れ応答する力	59.6%
5	子どもの発達に合わせて関わる力	55.8%
	親子の前で話す力	
7	ピアノの演奏力	44.2%
8	絵本・紙芝居の読み聞かせ力	25.0%
9	ふれ合い遊び	23.1%
10	手遊び	21.2%
	エフ・ロンシアター、ハ・ネルシアターなど演じる力	

## 6. 考察

### 6.1. 実施前後の平均値の差が大きかった項目

「グループチームでの協働」と「保育カンファレンス」に関する調査結果からは、「広場」における教育プログラムがこの 2 項目においては、有効に機能していることが読み取れる。仲間と支え合いながらチームで協働して行う経験と学生自らが「振り返り」を語り、他者の語りを傾聴しながら気づきを得ていくプロセスは、学生の子育て支援についての主体的な思いや実践力を高めていく効果が期待できる。この試みは、子育て支援の実践力を育むだけではなく、将来、就職後の同僚との関係づくりなど、保育実践に役立つことになるだろうと考える。また、設問 13「子育て支援活動の大切な態度や姿勢」においても実施後に大きく数値が伸びている。このような態度や姿勢が意識できることは、保育者としての育ちにもつながっていく。さらに、設問 14「学生が高めたいと思っている実践力に関する設問」の結果を見ると、実施後には、選択した項目の個数が多くなっているのと同時に「保育実践力」を基盤にしなが、より「子育て支援に求められる実践力」を選んでいる。子育て支援に必要な実践力を意識して、その力を高めていきたいと考えていることが推察できる。

実践活動を経験して、これらの変化が見られたことは、大きな意味を持つ。それは、子育て支援の重要性を理解しただけに止まらず、保育者としてさらに成長しようとする前向きな意識が高まったと考えられるからである。

### 6.2. 今後、検証が必要な項目

2 年次の実践活動では、授業で学んだ知識や技術をその場に応じて、学生が主体的に表

現したり、試したりする体験ができると考えたが、結果は「3 できる」に達していない。学生は、子育て支援活動が今まで経験してきた保育・教育実習とは違った実践力が求められると感じている。それは、設問 14 の「今後高めたい実践力」の意識変化にも現れている。保護者との関わりやコミュニケーション・親子関係に着目した学びは、「広場」での経験を通して育みたい力であるが、保護者が関わる設問においては、すべて「3 できる」以下の数値となっている。外部の保育・教育実習では、保護者との関わりを経験する機会が少なく、親支援には不安を抱えている学生が多いと考えられる。それだけに、学生にとっては、慣れ親しんだ環境で安心感を持って、学内で親との関わりから親支援について学ぶ意義は大きいといえる。「広場」は、子育てコーディネーターや教員の対応を観察し、言動や態度をモデルとして具体的なスキルを学ぶことのできる場である。調査結果から保護者との関わりに焦点を当てた演習内容や実践活動のあり方を工夫する必要性を再認識できた。

## 7. 保育カンファレンスでの学び

2014 年度から継続してきた学生と教職員との保育カンファレンスであるが、2016 年度からは、1 年次、2 年次のねらいを明確にすることで進め方の工夫を試みた。

1 年次のカンファレンスでは、まず、この場は何を語っても良い場であるということを知り、安心感の中で、一人一人の素朴な思いや考えを受け入れ、支持することで語りを引き出すように心がけた。そして、「子どもの年齢発達を捉える視点」「個人差、発達を踏まえた援助」「親子の関係性に注目すること」など、基礎的な学びに視点を当てカンファレンスを行った。一人の学生が実際の親子の姿や行動を語ることから、語りの中にある気づきや発見を教員が整理し、解説しながら他の学生とも学びが共有できるように導いた。2 年次においては、指導計画や実際の保育について振り返り、反省点や課題を出し合いながら、学生の気づきや疑問などを取り上げ、意見の交流を試みた。特に本年度は、保育カンファレンスを通して、自分とは違った見方や考え方を受け入れ、意見を交流することの意味や必要性について学ぶことを重視した。そして、学生自らが「連携と協働」について意識を高めていくことをねらいとした。また、学外の実習では、個の学びが中心となるが、「広場」の活動においては、グループで連携、協働する経験が大きな学びになることを確認し合う機会になった。<sup>6)</sup>

保育カンファレンス終了後に学生が提出する報告書からは、「親子を観察したり、関わったりする中から気付いたこと発見したこと」や「他者の語りに耳を傾け、他者から学びを得ている」という記述が多数見られた。また、実践活動について振り返り、語り合うことで「具体的な保育内容の工夫」という視点や「連携と協働、臨機応変な対応の必要性」について意識化ができつつあることが読み取れた。

<2 年次学生の報告書より>

「保育カンファレンスを通して気付いたこと・学んだことを書きましよう」の自由記述を

カテゴリー別にまとめると表8のとおりである。

表8 保育カンファレンスからの気づきと学び

自由記述の内容	件数
子ども・保護者・親子関係を観察したり、関わったりする中での気づきや発見	29
他者の語りから、自分とは違った思いや考えに触れての気づきや発見	23
子どもへの対応や保育技術・展開への工夫や反省・課題について	21
チーム・メンバーとの連携、協働の大切さについて	14
人とのつながり、出会いの大切さ	1
環境の工夫について	1

## 8. 今後の課題

質問紙調査の結果と報告書の一部から、学生の変化と成長について検討を試みたが、無記名の調査のために個々の変容について検討することができなかった。また、調査の回数や対象の学生の人数が限られていることや統計的な解析ができなかったなどから、この結果の妥当性や般化の可能性については限界がある。しかし、学生自らが企画・運営を行う経験を通して、意識に変化が見られたことや保育カンファレンスを通して、他者から学ぶことの意義や必要性について実感していることを読み取ることができた。また、今回の予備的な調査によって、学生が「広場」で得た経験や学びを、保育カンファレンスの場で、語り合うことによって経験を言語化し、意味付けをしたり、学びを共有したりすることによって意識の変化や定着が生じることを確認できたと考える。

今後は、統計分析に基づいた検討をしていくとともに、本学開講「家庭・子育て支援論」の授業内容と関連付けながら子育て支援に関する実践力を育むための教育的プログラムの開発を試みたい。特に実践活動の中で保護者支援に焦点を当てた授業展開が課題であるといえる。

### 【付記】

本稿は、JSPS 科研費 17K04663「保幼小中接続の相補的アカウントビリティ・システムの開発をめざす教育福祉行政の研究」（研究代表・藤岡恭子）の研究成果の一部である。

### 引用文献

- 1) 森上史郎（監）（2013）：『最新保育資料集 2013』ミネルヴァ書房 56
- 2) 厚生労働省告示板第 117 号（2017）：『保育所保育指針＜平成 29 年告示＞』フレーベル館 36-37



- 3) 内閣府 文部科学省告示第1号 厚生労働省(2017):『幼保連携型認定こども園教育・保育要領<平成29年告示>』38-39
- 4) 松本園子・永田陽子・福川須美 (2011):『実践家庭支援論』ななみ書房 1-28
- 5) 小島佳子 (2017):『鈴鹿大学短期大学部紀要』第37巻 183-195
- 6) 藤岡恭子 (代表) (2017):『保幼小中の接続と子育て支援の充実をめざす学校・家庭・地域の協働に関する実践開発』平成28年度学長裁量経費事業研究成果報告書 鈴鹿大学こども教育学部 179-180

執筆者の所属と連絡先

所属：鈴鹿大学短期大学部 生活コミュニケーション学科 こども学専攻

Email: [kojimay@suzuka-jc.ac.jp](mailto:kojimay@suzuka-jc.ac.jp)

## **A Preliminary Study of the Educational Benefits for Second Year Junior College Students Working in a Daycare Training Room**

**Yoshiko KOJIMA , Megumi YAMAZAKI**